

令和 3 年 8 月 23 日現在

機関番号：33936

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10220

研究課題名(和文) 認知症患者の倫理的対応マニュアルの作成および遠隔アドバイスシステムの構築

研究課題名(英文) Creating an ethical response manual for handling patients with dementia and building a remote advice system

研究代表者

伊藤 千晴 (ITO, CHI HARU)

人間環境大学・看護学部・教授

研究者番号：20434574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、【患者の尊厳確保】【認知症悪化の防止】のための認知症患者への倫理的対応マニュアルを作成し、広く普及させ、効果的に活用ができるよう遠隔アドバイスシステムを構築しサポート体制を整えることを目的とした。救急医療に従事する看護師の認知症患者に関する倫理的問題を明確にし、その結果に基づき対応マニュアルを作成することができた。有効性について海外の専門家からの意見を聞くことが難しい状況ではあったが、国内の専門家及び臨床現場の教育担当者と繰り返し検証を行っている。また専用のホームページを開設し、臨床の看護師間でのネットワークづくり及び遠隔アドバイスシステムの試用および評価を進めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、全国の救急病院に従事する看護師を対象に認知症患者に関する倫理的問題を明確にし、その結果に基づき倫理的対応マニュアルを作成した。マニュアルは専門家間での検討を繰り返した。併せて、マニュアルを広く普及させ、効果的に活用ができるよう遠隔アドバイスシステムを構築しサポート体制を整えることができた点は認知症患者の尊厳と権利を守り、安心して治療・ケアが受けられる体制の基盤を作ることができたと評価し社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to lay out a support framework by creating an ethical response manual for handling patients with dementia to [ensure patient dignity] and [prevent a deterioration of dementia], widely distributing said manual, and building a remote advice system in order to effectively utilize it. We clarified the ethical problems of nurses who practice emergency medicine on patients with dementia and were able to create a response manual based on the results. Although it was difficult to obtain opinions regarding the efficacy of this manual from specialists overseas, we have repeatedly conducted validations with domestic specialists and those in charge of education at clinical sites. We also set up a dedicated homepage and are continuously building a network among clinical nurses in addition to piloting/evaluating the remote advice system.

研究分野：看護倫理

キーワード：看護倫理 認知症患者 遠隔アドバイスシステム 対応マニュアル

## 研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

厚生労働省の発表によると、平成 24 年度において全国の 65 歳以上の高齢者のうち、認知症有病率推定値 15%、認知症有病者数約 462 万人と推計されており、今後も増加傾向が予測できる。認知症患者の場合、記憶力や判断力が低下し意思疎通が難しい。そのため在宅または老人施設において、急な怪我や病気で搬送され入院した場合、救急病院では対応が困難で受け入れが難しいという状況が報告されている。主な困難理由として、転倒転落の危険性、意思疎通の困難、検査や処置・ケアの際に協力が得られない、頻回なナースコールでの看護師の対応等である。そのため医療現場では緊急やむを得ない身体拘束（薬物による鎮静を含む）が実施されている。患者の安全と尊厳、どちらを優先にするのかは大変難しい倫理的課題ではあるが、身体拘束により、自由を奪われ様々な身体的・精神的機能の低下だけではなく、認知症を悪化させることになる。また家族にとっても医療者側への不満や不安につながる。これらの問題に対して認知症の対応マニュアルを作成し、活用している病院は 589 施設中わずか 16%であるという結果が国立長寿医療研究センターから示されている。

医療における適切なインフォームド・コンセント、自己決定権の尊重、情報開示など、患者の人権を重視した医療が問われるようになって久しい。しかし実際の医療現場では、今もなお医療との関連で発生する社会的問題や医療者の業務責任、医療における倫理的、道義的問題など十分な人権への配慮がなされているとは言いがたい。このような状況の中で、生命の危機的状況にある患者への救命治療が中心の急性期医療では、現場や状況の特殊性から、状況の急激な変化、医療提供の場の閉鎖性、本人の意思確認の困難さなど倫理判断や権利擁護に大きな問題があると言われている。特に認知症患者の場合、患者の尊厳を考えた患者の権利と擁護、例えば、身体拘束、インフォームド・コンセント、リビングウィルと DNAR (Do Not Attempt Resuscitation) などの問題についてどう考えるかがケアを提供するうえでの重要な課題となる。一方、厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチームは、「今後の認知症施策の方向性について」の報告書（2012 年）で「一般病院での認知症の人の手術、処置等の実施確保」「一般病院での認知症対応能力の向上」などの課題を指摘した。このように時代とともに急性期医療の現場が変化する中、認知症の対応マニュアルが個々の病院または看護協会が独自で作成されているが、普及率が低く、今後もさらに様々な倫理的問題が予測される以上、患者の尊厳と権利を守るための倫理的側面に焦点を当てた “認知症患者の倫理的対応マニュアル” を作成することは喫緊の課題である。

伊藤らが 2016 年夏に東海地方の病院 407 施設に質問紙調査を行った結果では、時間的余裕がなく中央都市で開催される看護倫理に関する研修会に参加がしにくい、施設側の経済的余裕がなく研修会に参加することが難しい、一度の研修会参加では病院内で活用していく自信がないという意見が聞かれた。このような現状の中で看護師たちは認知

症患者に対応，または若いスタッフに指導していかなくてはならないのである．マニュアルが作成されたとしても，予想外の倫理的問題が起こりうる可能性があり，特に中小規模の病院では活用ができない場合も予測できる．そこで，病床数等に関係なく，認知症の患者の尊厳と権利が守られ，安心して治療・ケアが受けられる体制を取るための遠隔アドバイスシステムの構築が必要不可欠であると考えた．

## 2．研究目的

最終的な目的は，認知症患者の尊厳と権利が守られる医療への変革である．

そのため以下の3点を目的にした．

- 1．認知症患者への倫理的対応マニュアルの作成
- 2．遠隔研修，ネットワークの構築
- 3．遠隔アドバイスシステムの構築

## 3．研究の方法

本研究は3つのステップをデザインした。(1)全国の救急病院を対象に認知症患者に関する倫理的問題を明確にするために質問紙調査を実施し，結果を踏まえ，認知症患者の倫理的対応マニュアルを作成した。(2)遠隔教育システム等について国内外の情報を幅広く集め，遠隔アドバイスシステム構築のためのネットワークのシステム化を行った。(3)遠隔アドバイスシステムに対するアプリケーション作成．

## 4．研究成果

本研究の第1段階として，全国の救急医療に勤務する看護師の認知症高齢者に関する倫理的問題を明らかにし，収集された倫理的問題の特徴を整理することを目的に，日本救急医学会に所属している全国の救急指定病院289か所で救急医療に勤務する経験2年目以上の看護師を対象として無記名自記式調査を行った．240名から回答があり，すべてを有効回答とした．看護を提供する際に守られるべき価値・義務について述べている第1条～6条に対して倫理的問題の頻度を整理した．結果，第1条の尊厳及び権利の尊重については，時々経験するが一番多く133名(55.4%)であった．第2条の平等に看護を提供するについては，あまり経験しないが一番多く101名(42.1%)であった．第3条の信頼関係に基づいて看護を提供するについては，あまり経験しないが一番多く96名(40.0%)であった．第4条の知る権利及び自己決定の権利を尊重し，その権利を擁護するについては，時々経験するが一番多く122名(50.8%)であった．第5条の守秘義務を遵守し，個人情報の保護についてはあまり経験しないが一番多く131名(54.6%)であった．第6条の安全の確保については時々経験するが一番多く，97名(40.4%)であった．以上の結果より，倫理綱領からみて，経験しない倫理的問題はないことが示された．またその中で，倫理的問題の頻度が常に経験または時々経験すると回答した数が，全体n=240の2/3，160人以上の条例に焦点をあ

てた。その結果、第1条「看護者は、人間の生命、人間としての尊厳及び権利を尊重する」が184人(全体の76.7%)、第4条の「看護者は、人々の知る権利及び自己決定の権利を尊重し、その権利を擁護する」189人(全体の78.8%)、第6条「看護者は、対象となる人々への看護が阻害されているときや危険にさらされているときは、人々を保護し安全を確保する」が179人(全体の74.6%)であった。この3つの倫理綱領に焦点をあてて結果を整理すると、認知症高齢患者の「尊厳及び権利」「自己決定の権利」「安全の確保」、具体的には身体拘束、医療従事者の言葉使いや態度、意思決定支援などの内容を基盤とした対応マニュアルを作成する必要があることが示唆された。

この成果を基に認知症患者の対応マニュアルの作成を進めた。

まず、共同研究者間でマニュアル内容の妥当性を検討し、さらに国内外の臨床倫理・看護・看護教育・看護管理の専門家間でも内容を吟味した。現在、研究代表者が行っている研修・講義・講演に関連する病院スタッフにも意見を求めており、より内容を精査している。

一方、「ともに考える。看護倫理の仲間たち」というホームページを立ち上げた。ここでは、臨床現場での看護師の倫理に関する疑問等に応えるべく内容とした。このホームページではアクセスした看護師からの質問があってもタイムリーにそれを確認できないというものであったため、改良し質問があった場合は管理者へメールが送信できるような仕組みとした。さらに臨床看護師たちのネットワーク作成のため、そのとりかかりとして伊藤・篠崎が研修・講義・講演を行っている病院スタッフの協力を得た。また2021年～WEBで「事例で学ぶ看護場面の倫理的ジレンマと考え方」を連載し、ネットワークづくりの一助とした。

遠隔アドバイスシステムに対するアプリケーション作成の目標には至っていないが、前述したようなホームページにより、アドバイスシステムの基盤は着実に構築できている。今後も継続してより効果的なアドバイスシステムの構築を課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊藤千晴 早瀬良 栗田愛 篠崎恵美子	4. 巻 11
2. 論文標題 医療現場における看護倫理研修に関する実態調査；中部地区を対象にした調査より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤千晴	4. 巻 増刊号
2. 論文標題 看護倫理とラダー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Nursing BUSINESS	6. 最初と最後の頁 110-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 千晴	4. 巻 11
2. 論文標題 医療現場における看護倫理研修に関する実態調査：中部地区を対象にした調査より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 千晴	4. 巻 -
2. 論文標題 倫理的課題の解決に向けた事例検討会～4分割法を用いて解決してみませんか～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第23回一般社団法人日本看護研究学会東海地方会学術集会抄録集	6. 最初と最後の頁 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 早瀬良 伊藤千晴 栗田愛 篠崎恵美子
2. 発表標題 職位別に見た救急医療に従事する看護師が経験する認知症患者の倫理的問題の特徴
3. 学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤千晴 夏目美貴子
2. 発表標題 救急医療現場で遭遇する認知症患者に対する倫理的問題
3. 学会等名 日本臨床倫理学会第8回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Chiharu Ito, Emiko Shinozaki, Ryo Hayase, Keiko Umeda, Akira Kondo,
2. 発表標題 Ethical issues with dementia patients experienced by nurses engaged in Japanese emergency care units
3. 学会等名 The 31st International Nursing Research Congress (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ito Chiharu, Shinozaki Emiko, Ejiri Harumi, Kondo Akira, Ban Ryosuke
2. 発表標題 Ethical issues concerning confidentiality and protection of personal information among patients with dementia in emergency medical care in Japan
3. 学会等名 2021 ICN (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤千晴 坂亮輔
2. 発表標題 倫理的課題に解決に向けた事例検討～4分割法を用いて解決してみませんか～
3. 学会等名 第23回 日本看護研究学会東海地方会 ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤千晴 早瀬良 篠崎恵美子 江尻晴美 近藤彰
2. 発表標題 Ethical issues with dementia patients experienced by nurses engaged in Japanese emergency care units With a focus on patient autonomy
3. 学会等名 The 31st International Nursing Research Congress (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤千晴 夏目美貴子
2. 発表標題 救急医療現場で遭遇する認知症患者に対する倫理的問題
3. 学会等名 日本臨床倫理学会 第8回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 早瀬良 伊藤千晴 篠崎恵美子
2. 発表標題 救急医療に従事する看護師が経験する認知症患者の倫理的問題の特徴 - 役職の有無による特徴 -
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂 亮輔
2. 発表標題 手術室における中堅看護師の倫理的行動力の現状と関連する要因
3. 学会等名 日本看護研究学会 第44回学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「ともに考える 看護倫理と仲間たち」  <a href="https://nursing-ethics.support/">https://nursing-ethics.support/</a> 立ち上げ          日総研よりweb連載「WEB連載 事例で学ぶ看護場面の倫理的ジレンマと考え方」          2021年～8回</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	篠崎 恵美子 (Shinozaki emiko) (50434577)	人間環境大学・看護学部・教授  (33936)	
研究分担者	栗田 愛 (Kurita ai) (50759149)	人間環境大学・看護学部・講師  (33936)	
研究分担者	早瀬 良 (Hayase ryo ryo) (90571927)	中部大学・生命健康科学部・講師  (33910)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会



〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------